
The World Where Dragon Lives

くすくすマックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The World Where Dragon Lives

【Nコード】

N4921R

【作者名】

くすくすマックス

【あらすじ】

ここは竜と人間が調和して生きる国。

・・・と言ったものの、そこまで大きくないし、国というと少し大袈裟かもしれない。

島、と言った方が近いかもしれない。

この島は、今これを読んでいる君から見れば、近代的なだろう。だからといって自然が無いわけでもない。

ドラゴンが古くから守り続けている大木の付近にはドラゴンが住め

るように自然が作ってある。

大木は島のだ真ん中。

中心には色々なドラゴンが住んでいる。

商業用のドラゴン「コマース」

養育用のドラゴン「アブリンギング」

農業用のドラゴン「アグリカルチャー」

そして、今最も重要とされている、

戦闘用のドラゴン「コンバット」

一番多く利用されているものは「コマース」。

荷運びなどに便利だから、らしい。

「コンバット」になれるドラゴンは5頭に1頭と、比較的小量だ。

だからここは人も戦闘に加わるようになっていく。

人が使う武器は主に「銃」や「剣」だ。

伝説によると、神々に選ばれし2頭のドラゴン

「聖なる竜」と「暗黒の竜」

が封印された剣がどこかに封印されているらしい。

その伝説にならって、今ではドラゴンの能力を武器に取り込むことも不可能じゃない。

最近はその技術を使った武器が多く使われている。

ドラゴンは人を選び、人はドラゴンに選ばれる。

その為選ばれた者と選んだドラゴンは、心を通い合わせることで相手の言葉を理解することができる。

これは、そんな島でただ一人の落ちこぼれの人間アルフォスと、彼を選んだ、神々に選ばれし竜の葛藤を描いた物語である。

TWDL 第1話「落ちこぼれの勇者」

アルフォス「はぁ．．．。」

学校が終わり、やる事も無いアルフォスは、商店街をぶらついていった。

「よう！！どつかの落ちこぼれさんよあ！！」

「今日もまたぶらぶらしてるのか？可愛そうになあ！！
はははははは！！！！」

アルフォス「．．．。」

何を言い返せばいいのかも分からない。

アルフォスは、気分転換に、島の中心に行くことにした。
ザワザワザワ．．．

グオオオオ！！

人の声や、ドラゴンの声があちこちから聞こえてくる。

ニクス「．．．ん。」

アルフォス「．．．あ。」

ニクス「よお、ニクス。どうした？」

アルフォス「ああ、ちよつと。気分転換に中心の森で休んでこよう
と思つて。」

ニクス「ふん、相変わらずのんびりやだな。」

アルフォス「まあ．．．ね。」

ニクス「俺はこいつの世話で忙しいから、今はいけないけど、

また今度、一緒に行こうぜ。」

アルフォス「うん。」

インテルメツォ（ニクスの相棒竜）「ギユオオオオオオ！！！！
たつ．．．たつ．．．たつ．．．

とぼとぼと、森に向かう。

途中でこんな声も聞こえたりする。

「おい、見るよ。落ちこぼれの『アルフォス』だぜ。」

「あ、ホントだ。情けないよな。俺達より年上なのに。」

「ハハハハハハ・・・」

アルフォス「・・・。」

とりあえず無視して進む。

ザザザッ・・・

アルフォス「・・・ふふっ、やっぱり落ち着くな・・・。この木の近くにいます。」

いやなこと全部忘れて・・・ん？」

ふと横を見ると、見たことない道が続いていた。

アルフォス「こんな道、あつたっけなあ・・・。」

とりあえず進んでみる。

スタ・・・スタ・・・スタ・・・

アルフォス「・・・。。。」

あたりは暗く、木漏れ日だけが道を照らしている。

スタ・・・スタ・・・スタ・・・

ザザア・・・

アルフォス「うっ・・・。」

木々を押し分けると、閃光が目に飛び込んできた。

アルフォス「こ・・・、ここは・・・？」

深く澄んだ水色の湖。それを囲うように並ぶ木々。

湖の中心に堂々と立つている大きな太い木。

アルフォス「もしかして・・・、これが本当の大木・・・？」

そつと木に近づいていく。

アルフォスは、大木に手を当てた。

キイイイイン！！！！

アルフォス「うわっ！！！？？」

目の前が真っ白になった。

「おい、どうする？俺にはコイツしかいねエと思うんだが・・・。」

頭の中に直接声が響いてくる。

アルフォス「なっ、何だ・・・！？？」

「はい、私も同意見です。きっとこの方なら・・・。」
「やっぱり・・・、だよな。コイツなら、きっと俺らを・・・。」
アルフォス「誰だ・・・!? 誰なんだよお・・・!?」
キイイイイン!!!
今度は目の前が真っ暗になった。

・
・
・
・
・

ザワザワザワザワ・・・
アルフォス「う・・・。」

目を開けると、自分の家のベッドに仰向けに寝ていた。
アルフォス「あ・・・あれ・・・?」

一体何が起こったのだろうか。

家から出ると、そこはいつもの町並みだった。

アルフォス「うーん、つかしーなー・・・。」

スタ・・・スタ・・・スタ・・・

もう一度大木のところに言ってみた。

けれど、あの道は無かった。

アルフォス「夢・・・だったのか・・・?」

ガサガサ・・・

アルフォス「!?」

後ろを振り返ると、そこには、この島の族長のような存在の人がいた。

族長「こつ、これ!!!そこで何をしておる!」

アルフォス「何をつて・・・特に理由は・・・。」

族長「それに・・・、何故そんなに大木に近づいておる!!!神が宿る大木じゃ!!!」

貴様のような汚れたものに触れさせるわけにはいかん!!」

アルフォス「何故、貴方の様な、神に近い存在の方が人間を差別するようなことをするのですか!!」

族長「うつ・・・。」

アルフォス「神は人を差別したりしないはずです。それに・・・」

族長「私の言うことを聞かぬか!! ならば格なる上は・・・。」

ギユイイン・・・

族長は、手に気功のような大きな玉が出来上がった。

アルフォス「なっ・・・。」

族長「力尽くで追い出すまでッ!!」

アルフォス「おい・・・!!!!」

「へー、いいじゃないか。気に入ってたぜ。」

アルフォス「!!」

チュドオオン!! (↑気功が発射される音)

ヒュウン・・・

グオオオオオオオ!!!!

バアアン!!!!

ビュウウウウ・・・

アルフォス「くっ・・・。」

あたりに爆風が起きた。

アルフォスは吹き飛ばされないように、大木を掴んでいた。

族長「なっ、なんじゃ!?!」

グルルルル・・・

「グオオオオオオオ!!!!!!」

T W W D L 第2話「落ちてこぼれた2匹の神さん」

チュドオオン！！（↑気功が発射される音）

ヒュウン・・・

グオオオオオオオオオ！！！！

バアアアン！！！！

ビュウウウウ・・・

アルフォス「くっ・・・。」

あたりに爆風が起きた。

アルフォスは吹き飛ばされないように、大木を掴んでいた。

族長「なっ、何じゃ！？」

グルルルル・・・

「グオオオオオオオオオ！！！！！！」

アルフォス「い・・・一体何が・・・くっ・・・。」

フウウ・・・

風が治まると、目の前には大きな黒い物陰があった。

族長「まっ・・・、まさか・・・、伝説の竜・・・

『アモンドラド』だとっ・・・！？」

アモンドラド「グルルオオ・・・。」

族長「ありえん、ありえんぞ！！

そんな・・・そんなはずは・・・。」

アモンドラドと呼ばれた竜は、少しアルフォスに目をやった。

すると、アルフォスの頭の中に直接声が響いてきた。

アモンドラド「しっかり掴まってろよ。」

アルフォス「へ・・・？」

ブン！！

竜は尻尾を振り、アルフォスを弾き飛ばした。

アルフォス「うわっ！？」

するとアルフォスは自然と竜にまたがった。

アモンドラド「グオオア！！」

アモンドラドはそう吐き捨てると、空へ舞い上がった。
ただひたすらにアモンドラドは飛んでいく。

アルフォスは落とされぬよう、しっかりと竜を掴んでいた。

少しすると、アモンドラドは水平になり、スピードを落とした。

アモンドラド「危ないところだったな。」

アルフォス「君は・・・？」

アモンドラド「あ？ 知るか。俺はただ神に選ばれたドラゴンだ。

最も強力な竜としてな。」

アルフォス「・・・？ もしかして、あの『暗黒の竜』・・・？」

アモンドラド「それが、どうかしたか？」

アルフォス「何で話ができるんだ・・・？」

アモンドラド「・・・鈍感だな。まだ気付かないのか？

『俺ら』がお前を選んだんだよ。」

アルフォス「俺ら』ってことはもしかしてあの『聖なる竜 ラフ

アエルド』

も・・・？」

アモンドラド「そういうことだ。」

アルフォス「・・・嘘だ。これは夢だ。夢に違いない！！」

パチン！！

アルフォス「・・・。」

痛い・・・？

アルフォス「ま・・・、マジかよ・・・。」
アモンドラド「竜は人を選ぶ。選ばれた者はその竜とは離れられない。」

古くからの掟だ。知ってるよな？」

アルフォス「まあ・・・、それくらいは・・・。」

アモンドラド「っつーことで、これからよろしく頼むぜ！」

アルフォス「ああ、うん・・・ よろしく。」

・・・はあ！？」

アモンドラド「何だ、嫌なのか？」

アルフォス「違うよ、この僕が、何でこんな神に選ばれたドラゴンたちなんかに・・・。」

アモンドラド「神は差別しないんじゃないのか？」

アルフォス「そっか・・・。じゃあ、僕、本当に・・・。」

選ばれたんだ・・・。」

アモンドラド「ずいぶんと嬉しそうだな。」

アルフォス「当たり前だろ！僕みたいな島の落ちこぼれが、

伝説の勇者ーみたいになすっげー存在になれるなんて・・・。

ん？待てよ・・・僕みたいのにそんな役が務まるのか・・・？」

アモンドラド「務まるさ。何故なら、俺らが選んだからさ。」
アルフォス「そっか、君達が・・・。」

そういえば、もう一頭のドラゴンは何処にいるの？」

アモンドラド「さあな。俺が知る由も無い。」
アルフォス「いや、知ってなきやいけないだろ。」

だって伝説にある剣は、2つの力が合わさって初めて1本の剣ができるから……。」
アモンドラド「あの剣は、元々対となる2本の剣だった。いや、なんだ。」

でなきや俺らが離れられるなんて天地がひっくり返ってもありえない話だ。」

アルフォス「そうなんだ……。」

アモンドラド「あれは1本でも2本でも使える万能な剣なんだ。すごいだろ？」

アルフォス「まあ、すごいんだ……。」

アモンドラド「パツとしない反応だな……。」

その時、バサツ バサツ と羽音が聞こえた。

アルフォス「な、何だ!？」

アモンドラド「ちょうどいいところに来たみたいだな。」

アルフォス「まさか……、ラファエルド……?」

ラファエルド「グオオオオオオ……。」

アモンドラドは後ろに方向転換した。

ラファエルド「初めまして、アルフォスさん。」

アルフォス「あ、どうも……。」

って何で僕の名前を？」

ラファエルド「知らないわけ無いじゃないですか。」

アモンドラド「さっきあそこで大騒ぎしてたもんな。」

ラファエルド「それよりも、もうすぐ貴方の家ですよ。」

アルフォス「あ、ホントだ……。」

アモンドラド「俺らは降ろしたらすぐさまに剣に戻る。

だからどつかお前がわかる場所に置いとけよ。」

アルフォス「わかった。……うん。」

ギョオオオオオン!!!!

アモンドラドは急にスピードを出した。

アルフォス「うわっ!!」

アルフォスは振り落とされてしまった。

アモンドラド「やっべ。」

キイイイイン!!

ラファエルドがとつさにアルフォスを背に乗せた。

アルフォス「はあ、はあ、死ぬかと思ったあ・・・。」

まあなんやかんやで家の前に着いた。

アモンドラド「戻るぞ。」

ラファエルド「はい。」

アルフォス「またね。」

ウン・・・ドサッ

漆黒と純白の2対の剣は、芝生の上に落ちた。

アルフォスは家に入り、自分の部屋の机の上にある刀掛けについている

剣をはずし、そこに2つをあわせて置いた。

翌日・・・

1階に下りると、アルフォスの父がお茶を飲みながら、新聞を読んでいた。

アルフォスは父にこう言った。

アルフォス「父さん、剣術を教えてよ。」

ブウッ

父はお茶を噴き出した。

アルフォスの父「ああ？お前がか？」

アルフォス「お願いだよ、教えてよ!!」

アルフォスの父は立派な剣術を持っている。

剣術の教師免許も持っているのだ。

アルフォスの父「馬鹿を言うな。お前に剣技など使えるものか。」

アルフォス「頼むよ父さん！！強くなりたいんだよ、僕は！！」
アルフォスの父「はぁ・・・、お前のその自信は何処からありふれてくるのか・・・。」

この時期は剣技の新米も多いだろうし、まあいいか。

こいつに戦闘の極意を覚えさせるいい機会だ。」

アルフォス「ありがとう、父さん！！」

アルフォスの父「訓練は明後日からだ。その間、しっかり準備をしておけよ。」

アルフォス「はい、父さん！！！！」

T W W D L 第3話「特訓開始!!」

あれから2日。

アルフォスは少し錆びた剣を手にし、階段を駆け下りた。

その勢いで玄関を飛び出し、少し周りを見た。

ドラゴンに乗って今日も騒がしいこの島で、一人ポツンと突っ立っている。

アルフォス「はぁ……。」

ため息を一つ吐いた。

アルフォス「……。何を落ち込んでいるのだ僕は。僕は伝説の竜に選ばれた最k y……。」

ドン!!

でぶ「おつと、悪イ……。と思つたら、落ちこぼれのアルフォス君じゃないか! ハハハハハ!!」

ハッハッハッハ……。」

アルフォス「……。いつかギャフンといわせてやる。」

数分歩いていると、T(raining)B(attle)S(ystem)R(oom)に着いた。

アルフォス「ここがTBSRか……。夢みたいだな。僕がここにこれるなんて。」

ウィーン……

アルフォス「うわっ!?……。何だ。自動ドアか……。」

スタスタスタ

とーさん「遅いぞアルフォス。3分遅刻だ。」

アルフォス「僕にはドラゴンがいないんだ。早いほうだろ?」

とーさん「甘いな。ここの脂肪くんだって歩いてきたんだぞ。」

でぶ「脂肪くんってやめろよ。」

とーさん「それに遅刻というのはなんやかんやであーでこーでそーで

あーもうめんどくせー。とにかく、これから訓練を始め

る。

アルフォス、そこに並べ。」

アルフォス「はいはい。」

とーさん「はいは1回！伸ばさない！！」

アルフォス「ハイ！！」

とーさん「よし、それではまず武器の基本となる素振りを練習しよう。

皆、武器は持ってきたか？」

デブ「おうよ。」

他人1「これでいいっすか？」

他人2「俺はハンマーもってきたぜ。・・・日曜大工品の。」

他人3「私のはお父様に磨いてもらったピッカピカの剣よ。」

コカゲ「だからなんなんだ。」

他人3「だからとは何よ。」

コカゲ「ん？なに？」

他人3「だってあなたが今・・・」

とーさん「私語は慎め！！」

全員「ハイ！！！」

とーさん「良い返事だ！！縦振りから練習するぞ。

まず利き手をつばに近づけて柄を持て。

そしてもう一方の手で柄の下の方を持つんだ。

肘をしっかりと体に着ける。勢いの良い振りができないか

らな。

まあ車で言うなら利き手がエンジン、反対の手がハンドルといったところか。

よし、まずは1回振ってみる。・・・っとその前に、木

刀に変えておこう。

真剣でやるとまあ危ないからな。」

全員「ハイ！！！」

全員は木刀を持って、言われたとおりに振った。

ブンー！

デブ「うおっ！？」

デブの木刀が前に飛んでいった。

とーさん「おい、脂肪！！何してる！！しっかり持て！！！」

デブ「だから脂肪つてやめてよ！！」

タッタッタッ

ガシッ

デブ「あーもーめんどくせーな！」

とーさん「私語は慎めとittedたろう！！」

デブ「はい・・・。」

とーさん「○○！！もつと足に力を入れろ！！！！背中を立て

ろ！！！！脇をあげるな！！！！

コカゲ！！」

コカゲ「はいっ！？」

とーさん「良い振りだ！！そのまま続けろ！！！！」

コカゲ「はいっ！！！！」

とーさん「・・・アルフォス、何だお前は・・・！！悪いところば

かりじゃないか！！！！」

アルフォス「はい・・・。」

とーさん「こりや補習授業だな。」

アルフォス「はあ。」

まあなんやかんやで練習が終わり、夕飯を食べに、全員で近くのレ

ストランに行った。

アルフォス「あゝ、どれにしようかな。」

とーさん「お子様セットでいいじゃないか。」

アルフォス「小学生以下限定だよ。」

とーさん「ああ、そうだったな。ハハハハ。」

アルフォス「ったくもう・・・。」

他人「すません、僕これでいいですか？」

とーさん「おお、いいぞ。今日は俺のおごりだ！！！！」

皆「いえーい!!」

他人2「じゃー俺コレ!!」

他人3「あたし、コレ!!」

コカゲ「僕コレ。」

とーさん「じゃんじゃん頼めよ。」

皆「え、マジで。」

とーさん「え・・・、いや、冗談だよ、冗談。」

皆「何だ。」

とーさん「それにしても、皆中々上手くなったじゃないか。一日でこんなに

上手になるやつは久しぶりだな。」

他人2「そーだろ、そーだろ!!」

他人3「当然じゃない。」

コカゲ「僕そんなに上手くなったか？」

とーさん「皆上手くなったぞ!!・・・アルフォスを除いて。」

全員「ハハハハ!!」

アルフォス「ハハ・・・笑うな!!」

でぶ「ハハハ・・・。お前はいつまでたっても落ちこぼれ・・・」

ガシャアーン!!

他人1「な、何だ!？」

「ぎゃはあー!!!皆逃げろー!!!」

とーさん「皆、気をつける。」

・・・何が、あつたんだ？」

「たつ、大変ダァー!!!! ドラゴンだ!!ドラゴンが暴れだした!!!!

っていうか攻めて来た!!!!」

とーさん「なんだってエ!!!? ドラゴンが!？」

「ああ、はあ、うあ、そうなんだよ、何故か、ドラゴンが急に・・・」

とーさん「他には?」

「あと、人が乗ってた。ドラゴンの、上に……。」「ドカアーン!!」

とーさん「よし、俺が行って来る。」

「どうか、お気をつけて……。」「

アルフォス「とーさん、僕も連れてって!!」

とーさん「なにを馬鹿げたことを言っている!!これはお前のようなヤツにできる仕事じゃない!!」

アルフォス「やだよ!!行く!!!!」

とーさん「お前はいつまで子供なんだ!!お子様ランチでも食ってろ!!!!」

アルフォス「う……。」「

とーさん「いいか、ここで大人しくしてろ。他の奴らにもそう言っ
とけ。

いいな?」

アルフォス「……。うん……。」「

他人1「何だって……。?」

アルフォス「大人しくしてろって……。」「

他人3「そうよねー、相手はドラゴンだし、ドラゴンを持ってない
あたしら

お子様には到底無理な仕事よねー。」「

アルフォス「ドラゴンなら……。」「

でぶ「あ?」

タッタッタッ

アルフォスが走り出した。

でぶ「お、おい!!何処行くんだよ!!!!大人しくしてろって……。
」

アルフォス「直ぐ、戻ってくるから!!!!」

タッタッタッ

アルフォスは、家へ飛び込み、階段を駆け上がった。

アルフォス「僕にだって……。」「

カシャン

アルフォスは2対の剣を持ち、また家を飛び出した。

アルフォス「アモンドラド！ー！ラファエルド！ー！」

シューイン・・・

アモン「どーしたどーした、やけに騒がしいな。」

ラファ「アモンドラド、あちらをよく見なさい。」

アモン「あ？・・・あー、ありやういぶんと派手にやってるね。」

ラファ「のんきなこと言ってる場合ではありません！！

このままではここが危ない。行きましよう、アルフォスさ

ん。」

アルフォス「・・・うん。」

ガシッ

アモン「面白え。やってやろーじゃん。」

バサッ バサッ バサッ

アルフォス「僕にだって・・・できる！ー！ー！ー！」

TWDL 第4話「死闘・・・、いや初闘!!」

とーさん「おりゃあ!!」

アルフォスの父は剣を思い切り振り下ろした。
すると竜に直撃した。

とーさん「おつしゃあ!!」

竜が地面に落ちると、竜は紫色の粉になって飛び散った。

とーさん「!？」

そのあと直ぐ紫色の粉が密集し、またさっきの竜に戻った。

とーさん「なんだ・・・、こいつ・・・!？」

・・・MOVE・・・

アルフォス「アモンドラド、もっとスピードでないの？」

アモン「でねーよ。・・・それにしても、ありゃ厄介な魔法だな

ア・・・。」

ラファ「ええ、まさか「ダークマター」を使用するとは・・・。」

アルフォス「魔法？ダークマター？ごめん、話についていけない。」

アモン「まあそうだろうな。神界と魔界の話だ。」

ラファ「ダークマターの使用は掟によって禁じられているはず・・・。」

アモン「アホう。ここは人間界だ。神の掟も何もねーよ。」

ラファ「しかしダークマターは使用者にも大きな代償が求められる物・・・。」

そう簡単に使う者はいないでしょう・・・。」

アルフォス「ダークマターって？」

ラファ「ダークマターは、最高クラスの禁断魔法。

ドラゴン一匹を犠牲にし、その魂とダークマターを融合させることによって

一匹の不死身なドラゴンが生まれる・・・。」

アルフォス「不死身・・・？」

アモン「何回指しても、何回切つても、また直ぐに復活するようなもんだよ。」

アルフォス「そんな・・・、倒しようが無いじゃないか。」

ラファ「いえ、ないことはありません。」

アルフォス「え？」

アモン「まさか・・・、俺もう疲れんのやだよ。」

ラファ「文句言つてないで力を貸しなさい。アルフォスさんの故郷が危ないんですよ。」

それに、貴方は私よりもスピードがあるのだから。」

アモン「・・・チツ、仕方ねえなあ。アルフォス、手伝え。」

アルフォス「え、僕？」

アルフォス「ああああああああああああああああああああ！！！！？」

アルフォスとアモンドラドは、竜に向かって急降下していった。

アモン「うつせえ！！ 少し静かにしてろ！！！！」

アルフォス「ムリだよおおおお！！」

アモン「ったく・・・、いいか？俺が合図するから、そしたらこの袋を俺の口の中に放り込め。」

アルフォス「わかつたああああああ！！！！」

アモンドラドはぐんぐんスピードを上げていく。

次第にあの竜が見えてきた。

アモン「今だ！！来い！！！！」

アルフォス「おりやつ。」

アモンドラドのお腹の中が光りだした。

・・・MOVE・・・

とーさん「くそっ・・・、キリがない・・・。」

「グアアア！！！！」

ガキン！！！！

とーさん「くあっ！！」

アルフォスの父の目の前に大きな竜の口があつた。

とーさん「・・・！！！！」

シューシューシューシュー

バゴオオオン！！！！

「ギアアアアア！！！！」

バアン！！！！

竜はまた、紫色の粉になつて飛び散つた。

その横から、猛スピードで白い物体が飛び込んできた。

ラファ「ゲート・トウ・ヘブン！！」

グオン！！！！

鈍い音と共に、異空間へ繋がる穴が空中にポツカリと開いた。

紫色の粉は、その中に吸い込まれた。

シュン・・・

穴がふさがれた。

そのあと直ぐラファエルドは、空中へ飛んでいった。

アモン「どうだった？」

ラファ「上手くいきました。」

アルフォス「何をしたの？」

ラファ「異空間への扉を開き、その中に突っ込んでおきました。

ダークマターだけを排除するために神々が創った魔法です。

」

アルフォス「すっげ。」

アモン「しかし、ダークマターを使える竜っていえば、魔界の竜ぐらいか。」

アルフォス「アモンドラドは魔界の竜じゃないの？」

アモン「ヴァカめ。俺は神界の竜だぞ。なめんな。」

アルフォス「ごめんなさい。そーだったんだ……。」

ラファ「まさか、ヤツは人間界までをも支配しようと企んでいるのかも知れませんか……。」

アモン「どうやらそうらしいな。」

アルフォス「ヤツ？支配？ごめん、話についていけない。」

アモン「まあそうだろうな。神界と……ん？このセリフさっきも言ったような……。」

ラファ「伝説によると、魔界の王ベリアルは、昔神界を滅ぼし、自分達のものにしようと思っていたらしいです。」

アモン「だけど、オーディンだのツールだのに邪魔されて、失敗に終わったんだ。」

ザマあ「見やがれてんだ。」

ラファ「何とか逃げ切ったベリアルは、魔界に身を潜め、何か強大な物を造っていたそうなんです。」

アモン「そして、四神を引き連れて再び神界を支配しようとしたそうなの。」

「だけどこれまた、失敗に終わった。」

アルフォス「四神って？」

アモン「あ？ガッコーで習わなかったのか？」

フェニックスとリヴァイアサンとベヒーモスとラムウだよ。」

アルフォス「あ、それゲーム……何でもありません。」

ラファ「これに懲りて、もう何千年もヤツは深海を襲っては来ませんでした。」

しかし、何か悪寒がした私達は、人間界に何かあると考えました。」

アモン「そこで派遣されたのが、俺達だ。」

アルフォス「ふーん……。」

ラファ「まさに、予想が的中したような感じですね。」

アモン「感じというか、したというか・・・。」

アルフォス「要するに、この地球が危ないってことだよな。」

アモン「まそゆことだな。」

アルフォス「なるほどそーゆーこと・・・。」

はぁ！？

・・・MOVE・・・

「おい、今の見たか・・・？」

「ああ、しつかり見たぜ・・・。」

「白銀の鱗、純白の翼。」

とーさん「間違いない、伝説の竜、ラファエルだ・・・。」

タツ　タツ　タツ

ニクス「あのー、ここらで何か大騒ぎがあつたようなので来たのですが・・・」

何かありましたか？」

とーさん「伝説の竜が、救ってくれたんだ・・・。」

ハハハ！！ハハ！！！すげえ！！！！やべえよ！！！！！！」

・・・MOVE・・・

他人3「あたし、聞いた。」

他人2「俺も聞こえたぜ。」

コカゲ「さすが。僕はあの人のこと信じてたよ。」

デブ「アルフォスの声だったよな・・・。」

TWDL 第5話「人とやつらとヒゲ男爵」

アルフォス「あーあ。疲れた。」

アモン「お前さっきまでピンピンしてたのに何に疲れたんだよ。」

アルフォス「ダークマター排除手伝ったじゃん？アレ。」

アモン「俺その後のこと「さっき」って言ったんだけど。」

アルフォス「へ？意味不。」

アモン「これだから落ちこぼれは・・・。」

お前はニクスみたいなエライ子には絶対なれないだろうな・

・。。」

アルフォス「ニクスか・・・。カッコいいよなー。みんなの憧れだ。」

それに比べて僕なんか・・・、僕なん・・・ん・・・。

」

アルフォスが泣き出したようだ。

アモン「・・・。おい、ラファエルド。何か言ってやれ。」

ラファ「・・・あの、こういう時だけ私にふるのやめてくれませんか？」

アモン「だって俺こういうの苦手だもーん。」

ラファ「なんて無責任な・・・。アルフォスさん、そんなに落ち込むことはありませんよ。」

だって貴方は私たちに選ばれた。

それはこの島で誰よりも偉いとは思いませんか？

アルフォス「・・・。。だーよね」 僕君達に選ばれたんだもんねー」

すっげーやー!!」

アルフォスの表情がパツと明るくなった。

アモン「立ち直り早ッ!!」

ラファ「アルフォスさんのいいところですよね。」

アルフォス「ラーン ラーン ラーンラーン」
アルフォスはスキップしている。

ガシャンガシャンガラガラガラ・・・

アルフォスは近くにあった食器棚に衝突した。

アルフォス「いたたた・・・、！！！！！」

アモン「あー、ヤツちゃった。俺もう知らね。 ラファ何とかしてやって。」

ラファ「また私ですか・・・。アモンドラドも手伝いなさい。貴方も選んだ人でしょう？」

アモン「しゃーねーな、やってやるよ。」

「なーんの音だ？アルフォス」

アルフォス「やべえ、父さんだ。皆、隠れて。」

アモン「ムリ。」ラファ「同じく。」

アルフォス「剣になりやいいでしょー！！」

ヴン・・・

二匹は剣になった。

父さん「・・・アルフォス、これはどういうことだ？」

アルフォス「あー、父さん、これはね・・・、ちよつと・・・。

ああ！でっ、でも、どっ、どーせ安いのしかかった
だろうし・・・。

いいよね？だいじょーだよね！？ね！！？？ね！！！！

？？？」

父さん「スウ・・・。」

父は息を吸い込んだ。

アルフォス「やっべ。」

アルフォスはとっさに耳をふさいだ。

父さん「まあ、許してやるか。」

アルフォス「え？今なんて・・・、許すって言った」

父さん「んなわけあるかあああああああい!!!!!!!!!!!!!!」
アルフォス「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

目の前で叫ばれたアルフォスは、目をカツと見開いた。

アルフォス「……」

父さん「何故こんなことになった!?何をしたらこうなるんだ、もう19だろお前!!」

アルフォス「訂正して欲しい。もうすぐ、20でs」

父さん「お前はだまつてろ!!!!!!」

アルフォス「……っ!!」

またアルフォスは目を見開いた。

父さん「理由はともあれ、この割った皿の量と同じ量、今すぐ買って来い!!」

アルフォス「ハイ!!」

父さん「クソッ、あいつたらまったく成長しないでブツブツブツブツ……」

父は階段を上っていった。

アルフォス「はぁ……。ノリで返事したはいいけど……。どうやってこれを数えればいいのだ……」

しかも無事な皿が2、3枚程度しかないだ!??なんてこった!!」

ヴン……

アモン「よお、どうだった?」

アルフォス「怒鳴られた。あと短い説教とか。」

ラファ「アモンドラドの順番じゃないんですか?」

アモン「知らねーぞ。……皆で叫ぼう!It's All fiction!!」

しゅいいん、カラララ……

割れていた食器も、倒れた棚も、全て元通りになっていた。

アルフォス「おー、すげーっ! っていうか完璧なパクリ……。アモン「そういうこと言わないの!」

ラファ「何はともあれ、直つてよかったですね。」

アルフォス「ありがとう、アモンドラド。」

アモン「・・・チツ、俺は当然のことをしたまでだ。礼はいらん。」

アルフォス「フツ・・・。」

アモン「あゝ？何がおかしい。」

ラファ「素直じゃないんですね。」

アモン「・・・？」

ピカツ ガラガラ ドシャーン！！

村人「うわぁ！！」

アルフォス「！？」

晴天の空から、ふと雷が落ちてきた。

アモン「何だ！？」

ガチャ

外に出ると、真つ黒な雲に大きな穴がポツカリ開いていて、そこから何か見える。

ラファ「アレは・・・。」

アルフォス「し、知ってるの？」

アモン「ああ、神界じゃ随分有名だぜ。」

ラファ「『雷神 トール』・・・！？何故ここに・・・。」

アルフォス「ああ、それも確かゲーム・・・。何でもないです。」

ピシャーン！！

また一つ、落雷が。

「？」「フォアツ、フォアツ、フォアツ。こんな所におったか。ラ

ファエルドも、アモンドラドも。」

アモン「何しに来たア！！トールの爺さんよオ！！」

トール「そんなことも知らんのか。いや、知らんほうがいいかもな。

フォアツ、フォアツ、フォアツ・・・ゴホッ ゴホッ・・・。

アモン「教える。」

トール「まあ待て。慌てるでない。ゆっくり聞け。」
ピラ

トールと呼ばれた生物は、一枚の紙切れを広げた。

トール「えー、ウオッホン。我々は、人間界を滅ぼし、征服に来た。

よって、邪魔なキサマ等を排除する。・・・だそうだ。」

アモン「！？何故神界の者が人間界を・・・？」

ラファ「何者かによつて操られているのでしょうか・・・。」

アモン「その何者つつーのは、まさか・・・。」

ラファ「ええ、恐らく、ベリアルかと・・・。」

アルフォス「ベリアルって、まさかあのベリアル。」

アモン「そのベリアルしかいねーよ。」

トール「・・・まーなんだか知らんが、ワシがお前らを倒す！！いいぞ！！！！！」

アルフォス「なんて唐突なんだ！！！」

TWDL 第6話「どこのパロじゃこんにゃろ。」

トール「ホレホレエ!!」

ドカアン ドカアン

トール「逃げてるだけじゃワシにや勝てぬぞお!!」

アモン「百も承知だア!!」

ドツカン ドツカン ドツカーン!!

無数の落雷を避ける、アルフォスに乗せたアモンドラドはトールに攻撃する方法を練ったりしていた。

アモン「ラファを使うしかないようだが・・・。

ラファに声をかけてたら俺がトールの雷に集中できない・・・。

アルフォス「僕の出番だア!」

アモン「ん? ああ、お前が・・・、そうか。アルフォスがいたか・・・。」

アルフォス「お困りならば俺様を呼べ! なびく白髪がかっこいいぜ!!」

ラファ「!!」

ラファ「はい・・・?」

アルフォス「そんなところでボーツと見てないで、

お前も協力しやがれやこのゴミがー!!」

ラファ「・・・今、何て?」

アルフォス「ってアモンが言ってたよ!」

アモン「!!」

ラファ「・・・フフフ・・・、いいでしょう。

さっさと終わらせて、後でじっくりいたぶってやりましょ
うか・・・。」

アモン「アルフォス・・・!!」

アルフォス「フンフンフーン」

アモン「き、キサマア・・・。」

ラファ「消えな、トールのおっさん!!」

ラファエルドはそう吐き捨てる、上空へ、ものすごいスピードで飛び上がった。

アルフォス「おお。」

アモン「関心してられる場合じゃねーよ・・・。」

俺逃げる。」

シュッ

アルフォスは空中に投げ出された。

アルフォス「ぎゃふーん。」

ドサ

地面からさほど高くなかったから良かったらしい。

上空へ

トール「久しいな、ラファエルド。」

ラファ「こちらこそ・・・。」

・・・あの、私ムシャクシャしてるんで、さっさと終わらせてもらえますか？」

トール「まあ、待て。そう焦る・・・。」

ラファ「待ってられつかよオ!!!!」

ブシュ

トール「・・・!!!!」

ラファエルドは、一瞬でトールの横を払い抜け、懷を引つかいた。

トール「くっ・・・、強くなったようだな・・・。」

ラファ「たまたま・・・ですよッ!!!!」

ガッ

トール「グバアッ!!!!」

ラファエルドは、人の形に似たトールの鳩尾に肘打ちを叩き込んだ。

トール「うぐッ!!」

連続攻撃だ!前方へ吹っ飛んだトールに向かって火球を吐いた。

トール「ギヤアー!!」

ラファエルドは、もつと上空へ飛び上がり、なにやら魔法陣のようなモノを作り出した。

ラファ「ファイナルホーリー!」

バギョオオオオオオオ!! (音)

そういうと、魔法陣から極太のレーザーがトールに向かって飛んでいった(?)。

トール「やめろ、こ、殺すな! 殺さないでクレエ!!!」

ギヤアアアアアア!!!

アモン「・・・。(地獄の時間がやってきた・・・)」

アルフォス「まさか・・・、殺すなんて・・・。」

ラファ「(小) 殺してなんかいませんよー(小終)」

アルフォス「あ?」

ラファエルドが羽音と共に降りてきた。

ラファ「私はただ、神界へ返してあげただけです。」

アルフォス「どゆことじゃー!」

ラファ「ファイナルホーリーというのは、相手をぶっ潰すとか、そっち系じゃなくて、

場所移動のために作られた魔法なんです。」

アルフォス「にしちゃあ、やたら派手だし、いかにも殺りそうな魔法だし・・・。」

ラファ「私も昔の神が何を考えているのか良く分かりません。」

ラファエルドは、微笑みながら答えた。

アルフォス「僕もわかんねえw そっぴや、アモンはいぢめないの?」

ラファ「あ、ええ。もうトールを色々やってたら気が済みました。」

アモン「あー、良かった。」

アルフォス「あ、アモンいたの。」

ラファ「ああ、いたんですか。なら話は別・・・。」

アモン「なんだとオ!!!」

ギヤアアアア！！

マテやゴルアああ！！！！

アルフォス「ハハハ。仲がいいね、あの二匹。」

「アルフォスー！！」

アルフォス「・・・？父さん！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4921r/>

The World Where Dragon Lives

2011年10月8日20時31分発行